も茨城の海洋生物研究の歴史が解説されている．このような埋もれやすい地域生物研究の成果をきっちり書きとめるのは地域研究者にしかできない技である．（田中次郎）

□大野正男：**「牧野植物図鑑」をめぐって―村越三千男・名和　靖との関係―** 日本古書通信（949）: 36–37;（950）: 22–23．2008．

大野氏は博物学関係の雑誌，文献のコレクターとして著名であり，定期刊行物のバックナンバーを完璧に揃えていることで知られている．はじめは協力関係にあった牧野富太郎と村越三千男が次第に離反し，ついに牧野植物図鑑に「警告」が書かれた経緯は，これまでにも何人かによって論じられてきた．著者はそれを踏まえた上，それまでは「図譜」という文字が用いられてきたのに「図鑑」と名付けられた理由，さらに個人名を冠しないのが普通だったのに「牧野植物図鑑」と冠図鑑になったわけを，豊富な資料から推定している．「～図鑑」という書名をわれわれは何の気なしに受け入れているが，意外なことに「植物図鑑」という呼び方は，かつては村越系のものに限って使われており，それ以外は出版社に関係なく「～図譜」を用いるのが普通であったそうだ．「植物図鑑」という名称があちこちの出版社で使われるようになったのは，戦後になってからだという．

牧野ははじめ村越と共に植物図鑑出版にかかわった関係で，離反後も北隆館から植物図鑑を刊行することになった．このとき村越の植物図鑑と区別する必要から，「牧野」を冠した書名にしたと考察する．しかし牧野はその理由を序文で説明していない．これについては，牧野と同じ時期に東大動物学教室での研修を経て，岐阜で教職の後に独立して名和昆虫研究所を設立した，名和　靖の行動を牧野が意識していたと考察している．牧野図鑑に先行した名和日本昆虫図説には「名和」を冠した理由が「他日天下に続出すべき他の昆虫図説と区別せんが為」と説明されているが，「牧野」を冠した理由がこれと同じだったことが，牧野の筆を走らせなかったのだろうと推察している．（金井弘夫）

□深泥池七人委員会編集部会（編著）：**深泥池の自然と暮らし**．B5版．247 pp．2008．￥3,150．サンライズ出版．ISBN: 978-4-88325-357-9．

京都の深泥池ほど古代から利用され，かつ近代の自然保護意識の発展と共に，繰り返し調査研究の対象になった池はあるまい．巻末の12頁にわたる深泥池年表から，それをうかがうことができる．

第1章：深泥池とは，第2章：深泥池生物群集の成り立ち，第3章：深泥池の文化と歴史，第4章：深泥池生態系管理への取り組み，第5章：深泥池の将来展望の5章より成る．最近の調査を過去の結果と比較して変遷を明らかにし，それを将来の予測と対策につなげる意図が見て取れる．一方第3章では，人文的な分野にも目配りして，自然史ばかりの問題ではないことをアッピールしている．各章の先頭頁には「この章のめざすところ」という見出しの，要約というかスローガンが示されており，多数のカラー写真や図を用いて，一般の人にも実情や問題点を分かりやすく説明しようとしている．

深泥池は周辺に石器時代，縄文時代，古墳時代，歴史時代の遺跡や窯跡が密集し，人口の多い京都盆地の農産物，建築材，燃料の供給地でもある上，鞍馬や貴船への通過地点でもあるという立地の故に，常に人との交渉を持ちながら存在し続けてきた．ところが池自体は，溜池として造られたものの，灌漑用としてはさして重要な役割を果してはいなかったように見える．それにもかかわらず，埋め立てられもせずに高層湿原や浮島が温存され，近代の目から見ると貴重な生き物の生息地であり続けることができたのは，地域の識者が事あるごとに手綱を締める行動をとった結果である．尾瀬ヶ原や釧路湿原とは異なり，文化の密接な干渉を受けながら今日に至った生態系として，他のいわゆる自然生態系の行方を予測する上で，たいへん貴重なキーを内蔵している．一読をお勧めする．（金井弘夫）

□今枝由郎：**ブータンに魅せられて**．岩波新書112．191 pp．2008．￥740．岩波書店．ISBN: 978-4-00-431120-1．

著者はフランスへ帰化したチベット仏教史

学者．偶然のきっかけからブータン国立図書館の建設にかかわり，10年を彼の地で過ごした．館長の高僧ロポン・ペマラと，第四代国王ジグメ・センゲ・ワンチュックとの交流を軸にして，独自の近代化を進めるブータンの内情を語っている．専制君主である国王が，「国民総幸福」というモットーに基づいて，自らの意思で議会制民主主義を進め，しかも王の定年制や弾劾制までを制度化したことは，世界的に有名でありかつ畏敬されている．王や高官としょっちゅう話ができる小さな政府の中で得られた，仏教を土台とするブータン人のものの考え方は，われわれ競争社会の常識が決して最善のものではないことを反省させる．国立図書館でありながら年に一冊も本を購入していないという奇妙な事実も，本・文献・経典などについての考え方の根本的な違いについて，あらためて考えさせる．

面白かったのは，登山禁止条例に至る経緯である．1980年に登山を解禁した結果登山隊が殺到し，外貨獲得の大資源になると期待された．ところがブータンにはポーターという職業がないため，政府は地元民を徴発してこれに当てた．これは人頭税に相当する合法的な徴用の一種であったが，この結果農牧民である彼らは家業を奪われる結果となり，王に直訴した．ブータン国民は王に直訴する権利がある．その趣旨は「仕事のない人たちの仕事のために，自分達の仕事ができない」というもので，王はこれを認めて登山は永久禁止となった．われわれの海外調査でも，「人夫を雇う」ということに何の抵抗感もないが，それが「仕事のない人たちの仕事のため」に，彼らの仕事を奪うと思われる社会もあるということは，頭にとめておく必要があるだろう．日本だって，少し前までは「草なんか取って何になる」と，ちょっと違う分野の人にさえ言われたではないか．一方，ネパールでは，公務の旅行ですらポーターを雇うのに連日四苦八苦している現実は，あらためてポーターという職業がある社会だということを認識させる．

もう一つの驚きは，著者がブータン入国許可を得るために，大学の夏休みの三カ月をデリーで待機するということを 5 年間も続けたことである．日本の研究室で，こんなことが許されるところがあるだろうか．

（金井弘夫）

□東京地図研究社：**地べたで再発見「東京」の凸凹地図**．B5．128 pp．2007．￥1,764（税込）．技術評論社．ISBN: 4-7741-2605-5．

地図は地形を読んでコースを案じたり，植生を想定したりと，誰でも使っている．しかし都会地では地表の構造物が多くて，等高線をたどることはむつかしい．本書の21–76頁では，二枚の空中写真を重ねて一枚に合成した写真（アナグリフ）を，付属の赤・青フィルタを通して見ることにより，立体視できるようにしてある．都心部，多摩ニュータウン，石神井川，青梅インターなど，25枚のアナグリフが，それに対応する略地図を伴って地形学的な解説がつけられている．これはときどき類書でもお目にかかるものである．

77–127頁には，地表の余計な物を取り払って高度だけで描いた陰影図（陰影段彩図）を用いて，22地域（ 2 –15 km 四方ほどの範囲）の地形の詳細を解説していて，たいへんおもしろい．たとえば渋谷は地形探索に絶好の場所で，西武百貨店の並立する二つのビルの間に地下連絡通路がない理由だとか，横浜が港湾として優れているのは後背地が狭いためで，ランドマークタワーのような高層ビルが，埋め立て地に杭も打たずに建てられているわけ．府中の浅間山が，多摩川でなく相模川の河岸段丘の名残りだとか，不忍池に流れ込んでいた石神井川が，飛鳥山で隅田川へと流路を変えた原因が不明だとか，言われてはじめて「そうか」と知るトピックが並んでいる．地形と関連ある地名も，ところどころ解説されている．

118–127頁では，中央線（東京—新宿）と小田急線（新宿—喜多見）の車窓風景が，地形と関連づけながら解説されている．また 8 –13頁は「山の手台地縦断ウォーク」と題して，同じ趣向で国会議事堂前の日本水準原点から多摩川二子橋までの解説がある．なにも知らなければ，ビルの谷間の坂を上がったり下がったりする退屈なコースだろうが，地形学的に見る目があれば，違った自然観察ができるものなのだということがよくわかる．ふつうの地図で見かける段彩図は，等高線間を